

# 音楽芸能の伝承において映像記録が果たしうる役割 —徳之島の芸能を例に

福岡正太<sup>†1</sup>

急速な社会の変化に伴う民俗的な芸能の伝承の危機に際して、映像による記録の必要性が叫ばれ、実際に多くの映像記録が作成されるようになってきている。しかし、記録作成やその活用の方法について、必ずしも明確な指針が確立しているとは言えず、映像記録が活用されずに眠っているケースもよく見られる。恐らく、その原因の1つは、芸能の伝承の過程に映像記録がうまく位置づけられていないことにあると思われる。そこで、私たちは、徳之島の芸能を例に、芸能の伝承者や地元の教育委員会の協力をあおぎ、関係者の意見を取り入れながら徳之島の芸能の映像記録を作成するプロジェクトを進めてきた。この発表では、この経験に基づき、望ましい芸能の映像記録とそのアーカイブのあり方について論じる。映像記録は、単に「お手本」として機能するばかりでなく、関係者同士の対話を生み出し、伝承へのモチベーションを高めていくきっかけともなる。伝承者らに利用しやすいアーカイブの構築こそが求められていると言えるだろう。

## Role of Visual Recording in the Transmission of Performing Arts of Tokunoshima

SHOTA FUKUOKA<sup>†1</sup>

This paper discusses a desirable way of producing audio-visual documentation of traditional performing arts and archiving them. Audio-visual documentation could serve as a source of learning of physical movements, rhythm and music of performing arts. Besides, it could also provoke discussion between stakeholders and stimulate the motivation to learn. For the sake of transmission of traditional performing arts, we need to build archives which could be easily utilized by practitioners of traditional performing arts.

### 1. 芸能の伝承の危機と映像記録

近年、急速な社会の変化にともない、民俗的な芸能の伝承の危機がしばしば報告されている。それは特定の国や地域だけではなく、世界各地に共通してみられる現象となっている。2003年に、ユネスコの無形文化遺産保護条約が採択されたのもこうした状況を反映している。民俗的な芸能は、そのコミュニティのアイデンティティの核として連綿と伝えられてきたという点に重要性がある。芸能は人間が演じるものであり、演じる人間やそれを見て楽しむ人間がいなくなってしまうと存続することができない。逆に言えば、伝承が途絶えることは、そのコミュニティ自体の存続が危機にさらされていることを表すともいえる。

こうした状況において、芸能を映像で記録することについて関心が高まっている。無形文化遺産保護条約においても、保護のための方策の1つとして、映像による記録作成が位置づけられている。しかし、どのように映像を公開すれば芸能の保護に結びつくのか、そもそもどの部分をどのように記録したら、芸能を十全に記録したことになるのかについて、多くの人が一致した考えをもっているわけでは

ない。その中で、民俗学者の山路興造は、記録用の映像のコンセプトは、その芸能が廃絶することがあっても、その映像を見れば復元が可能な映像記録を作製することにあると述べている[1]。音と動きを記録できる映像は、芸能の姿を具体的に記録にとどめることができる。私たちは、映像を見ながら、そこに記録された動きを真似して再現することができる。山路の提案は、映像記録がもつこの特性を生かしたものであるということが出来る。

一方、世代を越えて伝えられてきたという民俗的芸能の特質は、必ずしも映像で十分に記録できるわけではない。様々なしきたりや言い伝えなどの伝承、コミュニティにおける結束の強化と地位や役割などの分担による人間関係の構築など、芸能の伝承には目に見えている以上のものが付随していると考えられる。このような点にも注目しつつ、これまで人間文化研究機構連携研究等の中で進めてきた、徳之島の芸能の映像記録を例に取り上げ、映像記録の作成と公開について考えてみたい。

### 2. 「奄美大島の八月踊り」

2007年11月、私たちは国立民族学博物館（以下、民博）が製作した「奄美大島の八月踊り」（笹原亮二監修、77分、2007年）の上映会および意見交換会を奄美市立奄美博物館

<sup>†1</sup> 国立民族学博物館  
National Museum of Ethnology

にて開催した。八月踊りは、「夏正月」ともよばれる旧暦8月初旬、奄美大島全島の各集落で踊られる。男女が歌を掛け合いながら輪になって踊る芸能で、集落ごとに少しずつ異なる歌や踊りが伝承されている。この番組は、各地の集落の八月踊りを紹介し、その地域的多様性を描いたものだった。上映会の結果明らかになったのは、各集落で同じ時期に踊られるため、異なる集落の踊りについては、意外と知られていないということだった。

各集落は、程度の違いこそあれ、高齢化や青年・壮年層の人口流出により芸能の維持が難しくなったり、生活習慣の変化により、若年層が伝統的な芸能に触れて学ぶ機会が減少したりしている。意見交換会では、そうした伝承上の課題を各集落が共有していることも明らかになった。その上で、芸能の伝承において各自がおこなっている工夫についての情報交換もおこなわれた。参加者によれば、島唄とよばれる全島的に歌われる民謡については、これまでも議論をおこなう機会があったが、八月踊りについて集落の別を越えて議論をおこなう機会はほとんどなかったようだ。今後も継続的に、八月踊りについて意見を交換する機会をもっていきたいという声もあがった。

この経験により明らかになったのは、映像はただ単に芸能の動きを学ぶだけでなく、自分たち以外の芸能と比較し、他の芸能における工夫に学び、自らの芸能を振り返る機会ともなり得るということである。1人で映像を見ているだけではこのような体験をすることはできないが、立場を異にする人々が集まり一緒に映像を見ながら意見交換をすることでこうした機会を得ることができる。したがって、映像記録のアーカイブは、できる限り、実際に芸能にたずさわる人々が利用しやすいものにする必要があるだろう。

### 3. 「徳之島の唄と踊りと祭り」

「奄美大島の八月踊り」の上映会は、奄美大島の周辺の島々でもおこなった。そのうち徳之島では、ぜひ、徳之島の芸能についてもこうした映像を作りたいという声があがり、私たちはそれを受けて、人間文化研究機構連携研究のプロジェクト等の一環で、島内3町の関係者と密に連絡を取りながら、数年にわたって徳之島の歌や踊りの調査撮影を進めてきた。その結果、25集落において、のべ約240曲の歌や踊りを撮影記録した。

徳之島においては、頻繁に各集落等で小規模な上映会を開きながら調査撮影を進めた。それは芸能の映像記録にどの程度ニーズがあり、どのような映像が望まれているかを知るためだった。映像を上映すると、どこでも自分たちの芸能がどのように映っているかということが最も気になるようだった。一方で、他集落の映像を見て、自分たちのレパートリーとの比較をおこない、改めて自分たちの芸能を批評する姿もよく見られた。さらに一緒に映像を視聴しな

がら、私たちに芸能について多くのことを語ってくれた。

その過程で、私たちはそれぞれの歌や踊りのクリップを自由に選択して視聴できるようなプログラムにまとめ、それをタブレット端末で見てもらうことも試みた。実際に芸能にたずさわる人々にとって、一般的な説明はあまり必要とされず、むしろいろいろな地域の映像を簡単に比較して見るニーズが高かったからだ。さらにできるだけ手軽に映像を見られることも重要だった。撮影するたびに関係する集落にはDVDを渡していたが、DVDを渡されてもプレーヤーがなければその場で映像を見ることはできない。それに対して、タブレットに映像が入っていれば、その場ですぐに一緒に映像を見ることができる。すると、その場でいろいろな追加情報や意見を聴くこともでき、次の撮影のプランも相談することができた。結局、タブレットの場合、機器の維持管理や容量、画面の大きさ、また操作性などに若干難があり、最善という訳にはいかなかったが、手軽にその場で一緒に映像を見られるという点は大きな利点であることが明らかになった。

### 4. 記録された演技の一回性

映像は、誰を主な視聴者として想定するかによって撮影や編集が異なったものになる。それは、視聴者の立場や関心のあり方によって、映像の見方が異なってくるからである。たとえば、徳之島とはかかわりのない外部の間は、一般的、あるいは抽象的に映像を見る傾向が強いらる。そうした人々にとって、そこに映されているのは「徳之島の芸能」であって、どの集落の何年前の上演で、誰が出ているか、出来がどうであったかは、あまり気にならない。それに対して、実際にパフォーマンスにかかわった人々にとっては、そのパフォーマンスに自分が加わっているかどうか、いつの演技か、誰と一緒にやったものか、どのような出来だったか、そのときどのようなことが起こったかといった事に関心が向くだろう。そうした人々にとって映像は、特定の上演の記録であり、記憶を呼び起こす媒体でもある。

映像に映された演技は、特定の時と場所における上演であり、その時、目の前で演じられた1回きりの演技である。当然ながら、同じ演技は2度と見ることも記録することもできない。しかし、映像を見る時、その個別性に注目するかどうかは、見る側の関心や経験に依存することになる。私たちはそのことも意識した上で、映像の蓄積や利用を考えていく必要がある。ここでは、芸能の上演や伝承に資する映像について考えるため、主に芸能の伝承者や関係者にとってのビデオを想定しながら議論を進めたい。

### 5. 映像に映された社会関係

直接芸能にかかわる人々は、映像に記録された上演の一

回性を強く意識するだけでなく、映像の中に、そこには映っていない社会的な関係や関連する出来事を読み込んでいく傾向があるようだ。映像は特定の演技を記録するというだけでなく、特定の演技者の姿を記録する。外部の人間にとって彼らは匿名の人々にしか見えないが、関係者にとってはそこに映っている1人1人が名前をもった特定の個人である。もし映像の中に指導的立場にあるA氏ではなく、その指導を受けているB氏だけが映っていたとしたら、関係者はその映像をあまり適切な記録ではないと感じるだろう。

祭りを執りおこなうことや芸能を上演することは、しばしば、その社会のメンバーのあいだの人間関係を深めていく機会になる。子どもたちも芸能の上演に加わり、だんだん重要な役を与えられて、その社会のメンバーの一員として、周りの人びとから認められていくということもあるだろう。芸能を支えるコミュニティは不動のものではなく、年々、地域社会の変化やメンバーの変化などにもとない、人間関係も変化していく。芸能の上演は、そうした変化の中でおこなわれ、その時々環境において人間関係を具体的に構築していく1つの要素になっていると考えられるのである。

芸能を記録した映像は、その社会の人びとにとっては、こうした社会の変化をも反映したものとなっている。私たち研究者のように外部の人間にとっては、映像を見るだけでそれを理解することは難しい。しかし、地元の人びとと一緒に映像を見ながら対話を重ねることにより、その一端が明らかになっていくことがある。地元の人びとは、映像に映った出来事について、様々な角度から説明をしてくれる。そうした説明の多くは、その映像には映っていないことと関連している。それを聞くことで、私たちは映像に映っていることの背景に広がる様々な事項について理解を深めていくことができる。そして演技とともに起こっている社会的過程についても知るようになるのである。

## 6. 発見の場としての映像

一方、芸能にたずさわる人々と一緒に映像を見ていると、こちらの質問に答えるために、地元の人びとが考え込んでしまうこともある。私たちの質問が予期しないものであり、そうした角度から芸能について考えたことがなかったために、自分たちも改めて振り返る必要が出てくるためである。私たち外部の人間は、必ずしも、地元の人々と同じようには映像を見ない。事前に得た様々な知識と照らし合わせながら見たり、これまでに見たことのある他地域の芸能と比較しながら、自分の関心に沿ってその映像を見る。そのため、現地社会では当然と思われているようなことに疑問をもったりするのである。地元の人びとが、そこに映っていないものも思い浮かべながら映像を見ているとすれば、外

部の人間も同様に、そこに映っていないものを比較対象として念頭に置きながら映像を見ているのだと言えるだろう。

このように考えると、映像は、立場の異なる人びとの知見を交換することによる一種の発見の場ともなりうることがわかる。通常、映像で芸能を記録する時には、演技をしっかりと記録すれば、そこから演技を学ぶことができると考える。つまり演技のお手本として映像を利用することが想定されている。しかし、映像には映っていない芸能を支える地元の人びとの知識や経験、また、外部の人びとの視点から新たな知見を引き出す力を映像はもっている。こうした映像の力を発揮させ、芸能についての知見を深めていく媒体として映像を活用することも、映像の活用法の1つだろう。

## 7. 芸能の伝承のプロセスに映像を位置づける

徳之島町のMさんは、30年以上前、私が大学のゼミの調査で初めて徳之島を訪れたときにも大変お世話になった方である。当時から夏目踊りとよばれる井之川集落の伝統的な踊りの伝承に力を入れ、主要なレパートリーを録音したLPレコードも制作した。同レコードはCD化もされ、現在も、貴重な資料として活用されている。Mさんは、現在も夏目踊りの主要なメンバーの1人として、集落の行事に積極的に参加しているほか、奥様と一緒に小中学校で夏目踊りの指導もしている。また、徳之島町の文化財保護審議会会長として行政による文化財保護活動にも重要な貢献をなしている。

Mさんの活動からも垣間見える通り、芸能をめぐる人々の営みは、芸能を演じたり練習したりしている時以外にも、様々な動いている。こうしたプロセスを視野に収めた上で、ビデオが芸能に対して果たし得る役割を考えれば、単純にお手本としてビデオを使うこと以外にも、ビデオが芸能に様々な影響を与えうる事がわかるだろう。芸能の伝承は、行事がおこなわれる期間ばかりでなく、1年を通じて様々な活動を通じて進められている。記録映像についても、こうした伝承のプロセスに位置づけて活用をすすめられるようにする必要がある。映像資料のアーカイブ構築は非常に重要な仕事であるが、その努力は、たとえばここに紹介した芸能の伝承の現場において活用されてこそ価値をもつのではないだろうか。

## 参考文献

- 1) 山路興造: 京都・民族芸能の今—デジタル・アーカイブめぐって, アート・リサーチ Vol.2, pp.67-71 (2002).